

ヴァジラパーニ作『上師相承次第口訣』和訳研究(3) マイトリパ学統の四印契説と「阿闍梨灌頂」

静 春樹

はじめに

ある思想を理論と実践の総合的な体系・システムとして構築する場合、あるいは、そうしてある歴史的所与となる一つの思想の全体像の把握を試みる場合に、三分法 (trichotomy) は極めて有効な方法論である。西洋哲学において、プラトン由来の人間存在の理想を真・善・美の三範疇に指定する思想を使って、インマヌエル・カント (1724~1804) が彼の批判哲学を純粹理性批判・実践理性批判・判断力批判として展開したことは前者の例である。後者の例となる本稿の場合では、筆者がインド仏教の声聞乗・大乘 (波羅蜜乗・金剛乗) における統合原理として使用する三分法は三学 (戒・定・慧) である¹。その内、戒は仏教者の自覚をもつ者が遵守すべき日常生活規範・行儀である。定とは一定の心的機制を用いた観念世界の操作による心身変容の追求を内容とする修習である。こうした成仏を根本目的とする仏教徒の哲学的「立場」(見) が慧である。「三学」は研究の基本的な方法論としても、研究対象の全体像の把握と研究者自らの立ち位置の自己確認にとっても極めて有効な範疇と言える。それは、戒・定・慧の三学 (三アスペクト) が部派仏教 (声聞乗)・波羅蜜乗 (經部大乘)・金剛乗 (金剛大乘) の歴史を貫通する有力な統合のカテゴリーとなっていることにある。それは後の乗による先行する乗のそれに対して地平をスライドさせたユニークな継承・包摂関係であり、各乗の三学がそれぞれの独自性を保ちながら統合されているありようにある。例えば、波羅蜜乗では、その規範的な行儀 (生活・実践) のカテゴリーに六波羅蜜行・三聚淨戒などが出る。定としては、観法の「止」と「観」がよく知られている。「真言理趣」ではあるが金剛乗ではなく、歴史的・社会的に対立関係にあったと推定される所作タントラの曼荼羅行での観仏なども波羅蜜乗の定の手法である。慧 (哲学的立場) については、中観・唯識および所謂「如来蔵思想」の名を出すだけで十分であろう。貪欲行を根幹にもつ金剛乗は、戒が三昧耶 (samaya)・愛欲行 (rāgacaryā)、定が生起・究竟の二次第を大枠とする修習 (bhāvanā) である。この修習における重要なカテゴリーの一つが四印契 (caturmudrā) であり、瑜伽タントラ階梯の『真実摂経』では大印・三昧耶印・法印・羯磨印の順に開かれる²。各印契の意味内容と構成上の位置・順位は変化しても、この一組となる四つの名称は不変であり、金剛乗の全史を通して包括的で本質的な一組の修習の実践形態と認められている。十一世紀前半に活躍したマイトリパ (Maitripa, Maitreyanātha 別名アドヴァヤヴァジラ Advayavajra) の学統は、その学説の中心的な範疇の一つに「四印契 (羯磨印・法印・大印・三昧耶印の順)」説を指定し、インド金剛乗の全体像を提示した大

いなる試みであった。良きにつけ、悪しきにつけ、タントラ仏教（その全体が愛欲行で染められた）である限り、つまり無上瑜伽階梯の金剛乗での「四印契」説は、その教説の出発点に大印ではなく、羯磨印を置く。存在論からすると、現前の性瑜伽のパートナーとなる実際の生身の女性がアクチュアルな実在（*vasutu*）であるのに対して、羯磨印は生身の女性に理念・観念（効果的作用をもつことになる意識内の「共同観念」）である尊格が同置された、リアルとヴァーチャルの二重化された存在である。一方で、法印・三昧耶印は現実世界に現れた自然物（自然生）や人為的存在（種子・印相・曼荼羅 etc）がその当該集団の構成員の共同観念となった世界（実在ならぬ「存在」、メタヴァース、*metaverse*）内の集合・網構造の結節点である。こうしてヴァジラパーニが言う「例喩（象徴）としての」羯磨印を土台にした体系が母タントラ（主に『ヘーヴァジラタントラ』HVと略）における修習論の骨子となる。ここでマイトリパ学統の出す性瑜伽の四歓喜の順番に関する教説が後期インド仏教における大きな論争を惹起するものとなったことは前稿（「ヴァジラパーニ作『上師相承次第口訣』(2) 和訳研究」）で述べた。

1 マイトリパ学統の一つの特徴

マイトリパの学統には特定のタントラの註釈書が見られないことが理由であろうか、タントラがもつ呪法の類とそれに関連する雑多な所作の整理・統合化（広大羯磨集成）は見られない。これは、『カーラチャクラタントラ』の大註釈書『ヴィマラプラバー』や『サンプタタントラ』の註釈書として作られた『アームナーヤマンジャリー』（*ĀM*）が所謂「インド密教」の百科全書的な内容を誇るのとは対照的である。このことは、この流派では「戒（三昧耶・行）アспект」への論究が背面にまわるように見えることを意味する。つまり、筆者が唱える「三学腑分け理論」からすれば、「慧（見）アспект」が前面に出る理由から、〔四〕灌頂は取り上げられても、無戲論の行となる曼荼羅儀礼、つまり「戒アспект」に包含される澤地・浄化・曼荼羅作製・弟子引入から始まり狭義の灌頂儀礼を中心とする曼荼羅儀軌の全体は見られないのである。マイトリパ作『灌頂説示』（*Sekanirdeśa*）がその好例である。反面、彼は比較的小部な論書を中心に、インド仏教全体の概括としての仏教概論（要綱）に焦点を当てる著述を世に出した。インド仏教で大乘の下位概念となる波羅蜜乗と金剛乗の哲学的な擦り合わせに焦点を当てる彼らの営為は筆者の唱える「慧（見）アспект」の枢要にあたる。その解明と後期インド仏教における位置づけという最大の難問への挑戦が筆者には残されている。

金剛乗の信解者がフルメンバーシップを得るのに必須とされるのが灌頂である。真言理趣の世界では、早くに所作タントラの幾多の典籍で灌頂儀礼がマニュアル（儀軌）化されていることについては、[大塚：2013]に詳しい。その灌頂儀礼はマイトリパ学統の時代には四灌頂体系として展開している。希望者が灌頂受者と認められるためには福德・智慧の二資糧積集に励まねばならない。既にメンバーシップをもつ先輩たちに聚輪

(gaṇacakra) 開催の費用を負担することも弟子にとって福德資糧円満の極めて重要な手段となる。灌頂を成満し「今日ここに仏子となりました」と歓喜する新入門者はそれ以後、聚輪を始めとする集会の導師となる資格を手にする。いくつかの文献操作から、聚輪は聖者流の「三種の行」からすると、戯論の行、灌頂は無戯論の行に当たることになる。筆者の言う金剛乗の「戒（三昧耶・行）アスペクト」の領分である。

さて本稿が取り上げるヴァジラパーニ（の属するマイトリパ学統）が規定する「正しい灌頂」とは、彼らの判断からする般若智灌頂の三種の内の一つであり、それは性瑜伽における四歓喜の順番の決定と不可分に結びついている。そして四歓喜説は金剛乗の、とくに母タントラにおける「定（修習）アスペクト」の根拠となる重要な教説である。さらに、「正しい灌頂」は、「阿闍（識≒唯識）と金剛薩埵（空≒中観）による相互刻印」説とでも名づけうる彼らの波羅蜜大乘の理解に裏打ちされて論じられる。無上瑜伽階梯で展開した複雑極まりない四灌頂体系の内容・行儀自体に限ると、普通その儀則は「戒（アスペクト）」に属する幾多の曼荼羅儀軌を述べる典籍に残されている³。ところが、本稿が取り上げている『上師相承次第口訣』（GPU）にあつては、マイトリパの意図に忠実に四印契説の説示こそが主な目的なのであることから、四灌頂体系は主に四印契を導き出す契機として用いられているのである。

2 瓶灌頂と阿闍梨灌頂について

これは既に研究者たちの共通理解となっていることであるが、インド仏教金剛乗、より正確にはタントラの無上瑜伽階梯の最後まで展開した金剛乗は四灌頂体系を構築した。これは、瑜伽階梯までの瓶灌頂を基礎の一階部分とすれば⁴、その上に二階部分としての第二秘密灌頂・第三般若智灌頂、さらに三階部分としての第四灌頂からなる。桜井宗信『インド密教儀礼研究：後期インド密教の灌頂儀礼』は、真言理趣の世界で確立している曼荼羅儀礼の内の灌頂儀礼の内容とその実際の作法に分け入って詳細に論じた研究書である。筆者の考察は同書に深く負っている。

〔桜井：87~174〕によれば、「灌頂儀礼を構成する諸儀礼」として、弟子引入次第に続く五種灌頂（水・宝冠・金剛杵・鈴・名）の後から、第二灌頂である秘密灌頂の前に行われる諸儀礼、つまり初期金剛乗の段階で成立した基本的な思想を儀礼化した諸次第が「阿闍梨（不退転）灌頂」と「四種後方便儀礼」の項目で論じられている。GPUでは、金剛薩埵の灌頂（三昧耶・三昧耶）・応器・許可・金剛禁戒授与・授記・蘇息の六項目がそれに当たる。そこでは性瑜伽のパートナーである羯磨印契女も四歓喜説の内の初歓喜も現われることなく、あくまで瑜伽階梯のタントラ思想を出るものではない。

「四灌頂」を示唆する語が初めて出る典籍は、周知のごとく『秘密集会タントラ』（GS）であり、その十八章(113)にはつぎのように説かれている⁵。

abhiṣekaṃ tridhā bhedam asmin tantre prakalpitaṃ /
 kalaśābhiṣekaṃ prathanam dvitīyaṃ guhyābhiṣekataḥ /
 prajñājñānaṃ tṛtīyaṃ tu caturthaṃ tat punas tathā /

このタントラにおいて、灌頂に三種の区別があると解されている。
 すなわち第一は瓶灌頂であり、第二は秘密灌頂であり、
 第三は般若智〔灌頂〕であり、第四はまた同様〔の灌頂〕である。

つぎに、GPU の金剛乗を説示するパートから、灌頂儀礼の基礎部分の内容を出す当該箇所を引用する⁶。

つぎに、外の生起次第である金剛阿闍梨灌頂は身清浄を釈説するのであり、水灌頂 (udakābhiṣeka) ・宝冠 (mukuta) ・金剛杵 (vajra) ・鈴 (ghaṇṭā) ・名 (nāma) ・三印明の三昧耶 (vajraghaṇṭānāmamudrā-samaya) ・応器 (bhavyatā) ・許可 (anujñā) ・金剛禁戒 (vajravrata) ・授記 (vyākaraṇa) ・蘇息 (āśvāsa) で十一である。

ここでヴァジラパーニは、GS が説く「瓶灌頂」の名称に代わって「阿闍梨灌頂」を出す。広く承認される十一の項目をもつ「瓶灌頂」に相当する箇所は、マイトリパ学統に独自なカテゴリーである「五次第」の内の身清浄を意図する外の生起次第である「金剛阿闍梨灌頂」と定義されている。したがって GPU が出す阿闍梨灌頂は GS の定式化した瓶灌頂と外延を等しくすると言えよう。

つぎに、ヴァジラパーニの師匠であるマイトリパ (アドヴァヤヴァジラ) の意見を『灌頂主旨綱要』(Sekatātparyasaṃgraha) と『四印契口訣』に見る。

第一に瓶灌頂、第二は最高の秘密〔灌頂〕、第三は般若智〔灌頂〕、第四には、さらにそれが同様である。

この「第一に瓶灌頂」の意味とは、水・宝冠・金剛杵・鈴・名・阿闍梨を標幟とする六〔種〕の瓶灌頂である。外的な水により外的な汚れを〔取り除く〕ように、無明という汚れを洗除するためにそれで灌水するから「灌頂」〔と言うの〕である。これら〔六種の〕すべてに〔水〕瓶を用いるので「瓶灌頂」の名がある。またこれらは六如来を自性とするが故に不退転灌頂〔とも言う〕。すなわち水灌頂は大円鏡智を本体とし阿闍〔如来〕を自性としている。(略) 阿闍梨灌頂は〔第六仏たる〕金剛薩埵を自性としている⁷。

阿闍梨灌頂はまた、金剛杵の三昧耶、鈴の三昧耶、印契の三昧耶、応器、許可、誓戒、授記、蘇息といった諸相がある⁸。

その灌頂も〔四種であり〕瓶〔灌頂〕と秘密〔灌頂〕と般若智〔灌頂〕と第四〔灌頂〕

である。瓶〔灌頂〕は阿闍梨灌頂までであり身を浄化する⁹。

ここでのマイトリパは、GSの定式通り四灌頂の最初の範疇に瓶灌頂の術語を用い、その内容は五種灌頂（水・宝冠・金剛杵・鈴・名）に阿闍梨灌頂を加えた六種とする。さらに、「三印明の三昧耶」の儀則を金剛杵の三昧耶、鈴の三昧耶、印契の三昧耶に開き、それに「応器、許可、誓戒、授記、蘇息」をくわえた全体を阿闍梨灌頂と定義している。ここから、マイトリパがここで出す阿闍梨灌頂は瓶灌頂と外延を等しくしていることが分かる。因みに、桜井が同書で取り上げて論じているインドの阿闍梨たちの多くでは、阿闍梨灌頂はGPUが出す金剛薩埵の灌頂（三印明の三昧耶）と応器¹⁰の二項目に相当することから、「瓶灌頂の下位概念である狭義の阿闍梨灌頂」とも言えるものである。ともあれ、『灌頂主旨綱要』でのマイトリパは、GSの枠組みに従っていることになる。

つぎにHV由来の教説である四歓喜説に基づくヴァジラパーニの阿闍梨灌頂の解釈を引用する¹¹。

「抱擁と接吻などの多様は多様相の釈説」¹²とは、抱擁と接吻から始めるのであって、それらの語によって女陰と男根の平等瑜伽による撓拌の瑜伽が歓喜と知るべきである。それでは、「など」の語で平等瑜伽をどのように理解すべきかというならば、理解させるために広大に釈説されて、「十六歳の般若母を二臂で正しく抱擁すべし。金剛と鈴の平等瑜伽は阿闍梨灌頂と語られる」¹³と説かれているから、阿闍梨灌頂は初歓喜であり、金剛と鈴の平等瑜伽とは男根と女陰の瑜伽である。（略）

「阿闍梨・秘密・般若と第四もそれと同様である。灌頂は四の数で歓喜などの順を知るべし」¹⁴と説かれているから、阿闍梨灌頂は〔初〕歓喜であり、男根と女陰の平等瑜伽から知るべきである。それでは、水灌頂などの阿闍梨灌頂と釈説されたものは必要ないのかと言うならば、そうではない。それは外的生起次第であって、究竟次第ではないのである。

この引用から分かるように、マイトリパ学統の主要典籍では、四灌頂の第一段階で既に男女の交合（性瑜伽）に基づく儀礼が無造作に、しかも唐突に導入されている。私たちはまさにこの場で、真言理趣の潮流において、歴史ある所作タントラの時代から整備されてきた灌頂儀則（瓶灌頂）が新しいカテゴリー（マイトリパ学統オリジナルの「五次第」）に包摂されるのを目の当たりにすることとなる。そして、「瓶灌頂」と「阿闍梨灌頂」の二つの用語に関しては、師匠が（形式的に？）瓶灌頂の語を用い内容的にはそれが阿闍梨灌頂であるのに対して、弟子は瓶灌頂の語は用いないことの違いはあるものの、彼らの見解は基本的には同じであることが分かる。

3 GPU 金剛乗説示箇所の科文作成のために

マイトリパ学統の盛期である十一世紀は、インド金剛乗の阿闍梨・学匠・論師たちが最も華麗な理論展開を行った時代である。『真実撰経』以来「最勝の大乘」の徒であるとの自覚をもっていた金剛乗の阿闍梨たちが波羅蜜乗の教理に自在であったことは自明である。それは、彼らがそれを機会主義（御都合主義）的に運用したことは筆者が『ガナチャクラの研究』『ガナチャクラと金剛乗』で適宜述べてきたことである。ヴィクラマシーラ大僧院の南門を守護した比丘と言われるヴァーギーシュヴァラキールティ（Vāgīśvarakīrti）が、出家者である比丘を持金剛者となすべし」と言明する文言から筆者が名づけた「ヴァーギーシュヴァラ準則」はその好例である。マイトリパ学統も四印契・五次第・根・四灌頂・四歓喜・二諦・三密といった分析概念や統合概念を傍らから見ると恣意的に組み合わせた理論展開を行なった。そこに GPU 金剛乗の説示箇所の構成を表示する際の困難がある。蛇足になるが、インド仏教を受容したチベット仏教の論書に明瞭な「科文」が見られるのと同じ意味で、GPU にはそれが存在しないことが根本の問題である。以下は GPU の構造理解のために筆者が依拠した文献の参照箇所である。

1) 『四印契口訣』（*Caturmudropadeśa*）からの引用

西藏語訳が残されているマイトリパ作『四印契口訣』は、彼の手になる『真理の宝環』（*Tattvaratnāvalī*）と『灌頂説示』がカバーする領域を極めて簡略に（とくに前者）要約したレジュメと呼べる典籍である。デルゲ版で四葉の小品であり、弟子のヴァジラパーニとチベット人訳経師ナクツォの手で翻訳されている。ここでは、GPU の全体像理解のためにも、師匠マイトリパ作『四印契口訣』の関連部分を以下に出す¹⁵。

〔修習の階梯は〕外の生起次第と甚深の生起次第と究竟次第と円成次第と自性次第である。また如来の蘇息（*tathāgatāśvāsa*）と持金剛の蘇息（*vajradharāśvāsa*）である。さらに遍計所執性には依他起性、依他起性には円成実性、円成実性には金剛薩埵、金剛薩埵には大樂を刻印するのである。さらに、四印契から考察して、羯磨印は甚深の生起次第と究竟次第である。法印は円成次第である。大印は自性次第である。三昧耶印は外の生起次第である。遍計所執性での依他起性の印（金剛界四仏）は外の生起次第である。〔依他起性での〕円成実性の印（阿閼）はすべての尊格は識に過ぎない〔との了解である〕。〔円成実性での〕金剛薩埵の印とは、識はそれ自体究極的に空であると知ることである。〔金剛薩埵における〕大樂の印は、この〔識も空である〕ことが〔真の師匠の〕口訣〔によって〕直接に経験される状態を齎しているときである。羯磨印は灌頂を本性とする。その灌頂も〔四種であり〕瓶〔灌頂〕と秘密〔灌頂〕と般若智〔灌頂〕と第四〔灌頂〕である。瓶〔灌頂〕は阿闍梨灌頂までであり、身を浄化する。秘密〔灌頂〕は、方便と般若の二者から生じた菩提心（精液）を〔受者に〕授けるのであり、語を浄化する。般若智〔灌頂〕は三種であり、ハタ灌頂と悪しき灌頂と正しい灌頂である。

2) GPU からの引用¹⁶

そこで、上・中・下の根を意趣してから、外の生起次第は三昧耶印であり、阿闍梨灌頂と生起次第の尊格瑜伽である。下根〔者の場合〕の羯磨印については二つであり、如来の蘇息と持金剛の蘇息である。秘密灌頂と如来の蘇息は内の甚深なる生起次第である。持金剛の蘇息は究竟次第である。如来の蘇息と持金剛の蘇息は羯磨印であって、中根〔者の場合〕である。円成次第は法印であり、上根〔者の場合〕である。自性次第は大印であって、上根〔者〕のさらに上（極上根者）である。

3) 『灌頂説示難語釈』（*Sekanirdeśapañjikā*）からの引用¹⁷

〔Rāmapāla 曰く〕それ（四種成淫）は外の生起〔次第〕として解釈されるべきである。〔問う〕それでは、水灌頂など阿闍梨〔灌頂〕として説かれているものはどうなるのか。〔Rāmapāla 曰く〕それも外の生起〔次第〕として理解されるべきである。如来の蘇息である歓喜も阿闍梨〔灌頂〕であることは、甚深の生起〔次第〕によって、また持金剛の蘇息である歓喜が阿闍梨灌頂であることも究竟〔次第〕によって、そして四印契の観点からは、羯磨印は円成〔次第〕によって阿闍梨〔灌頂〕として理解されるべきである¹⁸。

4 GPU 金剛乘説示箇所構成

凡例

1. 「構成」の作成に当たってはデルゲ版 (Tsu.169b5-183a5) と北京版 (Nu.190b6-206b4) を用いた。
2. 併せて、中華西藏大蔵経刊本 (Ch と略, pp. 460-493) の頁番号も使用する。行番号は L で示す。

果〔乗〕である金剛乗の説示

0. 概括（金剛乗の優越性、方便タントラの五分類、有情の根の区分と〔マイトリパ学統の〕五次第・四印契・四灌頂の関係 etc）(D169b5) (P190b5) (Ch460L1)

I プレ羯磨印

- 1 外の生起次第（阿闍梨灌頂）—— 下根の要約 (D170b3) (P191b5) (Ch462L2)
 1. 水灌頂（阿閼如来）(D170b4) (P191b6) (Ch462L7)
 2. 宝冠灌頂（宝生如来）(D170b5) (P191b8) (Ch462L13)
 3. 金剛杵灌頂（無量光如来）(D170b6) (P192a1) (Ch462L16)
 4. 鈴灌頂（不空成就如来）(D171a4) (P192a8) (Ch463L12)
 5. 名灌頂（毘盧遮那如来）(D171b4) (P193a2) (Ch464L20)

以上、（五部灌頂）
6. 金剛薩埵の灌頂（三昧耶の三昧耶）(D171b6) (P193a5) (Ch465L7)
7. 応器 (D172a2) (P193a8) (Ch465L15)
8. 許可 (D172a2) (P193b1) (Ch465L18)

9. 金剛禁戒灌頂 (D172a4) (P193b3) (Ch466L1)
 10. 授記 (D172a4) (P193b3) (Ch466L3)
 11. 蘇息 (D172a5) (P193b4) (Ch466L5) [以上『紀要』No.34 掲載]
 - 1) 如来の蘇息 (D172a6) (P193b7) (Ch466L12)
 - 2) 持金剛の蘇息 (D172b7) (P194b1) (Ch467L20)
- 以上、外の生起次第であり下根の概要

II 羯磨印

- A 甚深の生起次第 (秘密灌頂) (D173a5) (P194b7) (Ch468L17)
 - B 究竟次第 (般若智灌頂)
- 修習論の範疇の略説 (五次第・四印契・三業) (D173b3) (P195a6) (Ch469L15)
1. 羯磨印との〔性交渉を例喩とする般若智〕灌頂の三分
 - 1) ハタ灌頂批判 (D174a1) (P195b6) (Ch470L15)
 - 2) 悪しき灌頂批判 (D175a3) (P197a3) (Ch473L10) [以上『紀要』No.35 掲載]
 - 3) 正しい灌頂 (持金剛の蘇息・究竟次第) [以下『紀要』当号掲載]
- 四刹那・四歓喜の順番 (D175b3) (P197b4) (Ch474L16)
- イ) 多様相の刹那 (平等瑜伽三阿闍梨灌頂) — (初歓喜)
 - ロ) 異熟相の刹那 (最勝歓喜) (D176a4) (P198a7) (Ch476L3)
 - ハ) 離相の刹那—俱生歓喜 (D176b1) (P198b4) (Ch476L18)
 - ニ) 磨滅相の刹那—離歓喜 (D177b1) (P199b8) (Ch479L8)

III 法印

- C 円成次第 (D177b7) (P200a8) (Ch480L11) — 上根
- イ) 多様相の刹那 (初歓喜) (D178a1) (P200b2) (Ch480L16)
 - ロ) 異熟相の刹那 (最勝歓喜) (D178a4) (P200b5) (Ch481L3)
 - ハ) 離相の刹那—俱生歓喜 (D178a6) (P200b8) (Ch481L11)
 - ニ) 磨滅相の刹那—離歓喜 (D178b3) (P201a5) (Ch482L2)

IV 大印

- D 自性次第 (D179a1) (P201b4) (Ch483L2) — 上根のさらに上 (極上根)
1. 定義
 2. 五つの意味 [以下別稿掲載予定]
 - 1) 本不生 (D179b2) (P202a6) (Ch484L8)
 - 2) 無自性 (D179b6) (P202b4) (Ch485L2)
 - 3) 一切処遍満 (D180a1) (P202b7) (Ch485L11)
 - 4) 不変 (D180a3) (P203a1) (Ch485L17)
 - 5) 一切時者 (D180a6) (P203a5) (Ch486L8)

V 三昧耶印

- A (「外の生起次第」) (D182b1) (P205b3) (Ch491L15)
- 奥書 (D183a4-5) (P206b3-4) (Ch493L11-16)

5 GPU テキストと和訳

上師相承次第口訣（Guruparamparakramopadeśa）金剛乗の部（3）

蔵訳テキスト

II 羯磨印

B 究竟次第（般若智灌頂）

3) 正しい灌頂（持金剛の蘇息・究竟次第）

四刹那・四歓喜の順番（D175b3）（P197b4）（Ch474L16）

イ）多様相の刹那（平等瑜伽≡阿闍梨灌頂）—（初歓喜）

de nas bzhan yang nges pa'i don yang dag pa'i dbang bskur ba'i rim pa rje 'chang gi dbug
dbyung ba bstan par bya ste / thog mar phyi rol gyi bya ba 'o byed pa dang 'khyud pa nas brtsams
te bo la dang ka kko la mnyam par sbyor ba'i srub pa dang bsrub(PN srub) pa'i sbyor ba'i dus su
gzung ba dang 'dzin pa'i rtog pa'i shes pa ni nram pa sna tshogs pa'i skad cig ma ste / dga' ba dang
po'o // (N198b) de (Ch475) yang 'di skad du /

e yi cha byad bzang po gang // dbus su waṃ(PN bam) gyis nram par brgyan //

bde ba thams cad kyi ni gnas // sangs rgyas rin chen za ma tog //

ces gsungs pas / dga' ba thams cad chos kyi 'byung gnas su shes par bya ba'i phyir 'o byed 'khyud
pa'i bya ba gcig pu la dga' ba ni ma yin no // de yang 'dod rgyal ma yin te / lung las mdor bstan pa
dang / rgyas par bstan pa dang / rab tu rgyas par bstan pa'o // de la mdor bstan pa ni /

'khyud dang 'o byed la sogs pa / sna tshogs nram pa sna tshogs (P198a) bshad //

ces bya ba ni 'khyud pa dang 'o byed pa nas brtsams te / de la sogs pa'i sgras bha ga dang linga(N
ling ga) mnyam par sbyor bas srub dang bsrub(PN srub) pa'i sbyor ba ni dga' bar rig par bya'o //

'o na ci sogs pa'i sgra'i(PN sgras) mnyam par sbyor ba ji ltar rtogs par bya zhe na / rtogs par bya
ba'i phyir rgyas par bshad pa /

shes rab bcu drug lon (D176a) pa la // lag pa gnyis kyis yang dag 'khyud //

rdo rje dril bu mnyam sbyor bas // slob dpon dbang du rab tu brjod //

ces gsungs pas slob dpon gyi dbang ni dga' ba (PN om) dang po ste / rdo rje dril bu mnyam sbyor
ba // zhes bya ba ni bo la dang ka kko(PN ko) la mnyam par(D om) sbyor ba'o // des na dga' ba
dang po yang mnyam par sbyor ba las rtogs par bya'o //

'o na ci dga' ba dang po sgrub par byed pa la slob dpon gyi dbang gi tshigs su bcad pas ji ltar rtogs

par bya zhe na / de nyid kyi phyir rab tu rgyas par bshad pa /

slob dpon gsang ba shes rab dang // bzhi pa de yang de bzhin no //

dbang ni bzhi yi(PN bzhi'i) grangs kyis ni // dga' ba la sogs rim(PN rims) shes bya //

zhes gsungs pas / slob dpon gyi (PN om) dbang ni dga' ba ste / bo la dang ka kko(PN ko) la mnyam
par sbyor ba las rig par bya'o //

'o na (Ch476) chu'i dbang la sogs pa slob dpon gyi dbang du bshad pa de dgos par mi 'gyur ram
zhe na ma yin te / de ni phyi bskyed pa'i (N199a) rim pa ste / rdzogs pa'i rim pa ma yin no //

ロ) 異熟相の刹那 (最勝歓喜) (D176a4) (P198a7) (Ch476L3)

de nas byang chub kyi sems kun rdzob kun da'i kha dog lta bu la don dam bde ba'i rang bzhin
gyis(PN gyi) rdo rje nor bu'i dkyil na gnas pa la gzung ba dang 'dzin pas stong pa'i shes pa rang rig
pa yongs su grub pa nyams su myong ba ni rnam par smin pa'i(D pa) skad cig ma la mchog tu dga'
ba 'grub pa'o // de yang mdor bstan pa dang / rgyas par bstan pa rnam pa gnyis kyis rtogs par bya'o
// de la mdor bstan pa ni /

rnam par smin pa de las bzlog(PN zlog) // bde ba'i ye (P198b) shes zab pa(PN om) nyid //

ces gsungs pas rnam par smin pa de las bzlog(PN zlog) pa ste / de zhes bya ba ni rnam pa sna
tshogs te gzung 'dzin no // gzung 'dzin las bzlog pa ni gzung 'dzin gyis stong pa yongs su grub pa
rang rig pa ni rnam par smin pa'i skad cig ma ste / mchog tu dga' ba'o //

'on te 'di yang rnam par smin pa'i skad cig ma ste / mchog tu dga' ba ni ma yin no zhe na / mchog
tu dga' ba rtogs par bya ba'i phyir rgyas par bshad pa /

mchog tu dga' ba yang dag thob // sna tshogs spangs pa'i skad cig la //

ston pas smras pa sems dpa' che // bde ba chen po rnam par zung //

zhes gsungs pa ni(PN pa'i) sna tshogs spangs pa yin te / (D176b) sna tshogs ni rnam pa sna tshogs
so // de spangs pa'i skad cig ma ni rnam par smin pa ste mchog tu dga' ba'o //

ハ) 離相の刹那—俱生歓喜 (D176b1) (P198b4) (Ch476L18)

da ni lhan cig skyes pa bstan pa'i phyir / rgyud chen sgyu 'phrul dra ba las /

bcu drug phyed phyed thig le can // yang lag med pa'i rtsis las 'das //

zhes gsungs te / bde ba chen po'i 'khor lo'i yi ge ham 'od du zhu nas bcu drug gi(PN gis) phyed

brgyad / brgyad (Ch477) kyi phyed thig le bzhi ste / gnyis ka kko(PN ko) lar lhung nas / gnyis rigs
kyi bdag po'i kha dang / mdzes ma'i spyi bo na mnyam par gnas so // de yang 'di skad du /

gnyis gnas gnyis ni mnyan (N199b) pa'i dbus / rdo rje nas lhung padmar reg //
mi bskyod rdo rje nas lhung ba // rdo rje padma la reg pa //
rgyu la 'bras bus rgyas btab cing // 'bras bu la yang rgyus rgyas gdab //
'di ni bde chen rgyal po yin //

zhes gsungs pas thig le gnyis lhung nas gnyis mnyam par gnas te / de yang rigs kyi bdag po'i kha
na gnas pa mi bskyod pa ste / rang rig pa nyid nyams su myong ba ni thabs so // mdzes ma'i spyi
bo na gnas pa ni(D pa, N pa'i) rdo rje sems dpa' ste / stong pa nyid rang bzhin (P199a) med pa ni
shes rab bo // 'bras bu rdo rje sems dpas(PN dpa' yis) rgyu mi bskyod pa la rgyas btab pas rtag pa'i
mtha' bsal nas nyams su myong ba nyid rang bzhin med par byed do // yang mi bskyod pas rdo
rje sems dpa' la rgyas btab pas chad pa'i mtha' bsal(N gsal) nas rang bzhin med pa nyid nyams su
myong bar byed do // de ltar na nyams su myong ba dang / stong pa nyid zung du 'jug pa'o // de
nyid la rdo rje sems dpa' stong pa nyid dang snying rje dang thabs dang shes rab gnyis su med pa
zhes bya ste / mtha' gnyis la mi gnas pa'o // de nyid gzhan gyis bsgrub pa'i phyir mdor bstan pa
dang / rgyas par bstan pa dang / rab tu rgyas par bstan pa'o //

bco lnga cha yi(PN cha'i) bdag nyid kyi // zla ba byang chub sems su 'gyur //
bde ba chen po ā li'i gzugs // rnal 'byor ma rnams de yi(PN de'i) cha //

zhes gsungs pa ni zla ba yongs su gang ba bcu drug la bco lnga'i yon tan dang yang ldan pas ni
byang chub kyi sems mtshon te / byang chub kyi sems bde ba chen po ste / ā li kā li'i (Ch478)
gzugs so // ā li las yi ge a(PN ā) ni rje btsun kye'i (D177a) rdo rje'o // lhag ma(PN cha) bco lnga
ni lha mo rnams kyi sa bon no // des na bcu drug pa'i aḥ ni tsheg drag(P dag) ste / thig le gnyis su
'gyur ro // de bas na zla ba ni byang chub kyi sems / bde ba chen po ni ā(D a) li'o // ā li bcu drug pa
ni thig le gnyis gnyis su shes par bya'o //

'o na ci'i (N200a) phyir ā li bcu drug la rje btsun kye'i rdo rje'i rang bzhin bde ba chen po yin no(D
om) zhe na / de nyid gsal(P bsal) bar bstan pa'i phyir rgyas par bstan pa /

gang phyir bcu drug cha med pa // 'bad pas kun gyi lhag ma spangs //
don gyi bya ba mi byed phyir //

zhes gsungs te / ā li bcu(PN bco) lngas lha mo rnams kyi sa bon byed la bcu drug pa'i ā li ni skye
ba med pa ste / don gyi bya ba'am 'gag pa med do // (P199b) des na skye ba med pa ni rje btsun

kye'i rdo rje'o // de nas rje btsun kye'i rdo rje nyid kyis thig le gnyis su ji ltar shes she(PN zhe) na /
gnyis su bsgrub par bya ba'i phyir rab tu rgyas par bstan pa /

mchog gi mtha' dang dga' bral dbus // stong dang stong min he ru ka //

zhes gsungs so // de bas na mchog tu dga' ba dang / dga' bral gyi dbus su rje btsun he ru ka ni kye'i
rdo rje thig le gnyis so //

'o na stong pa'i sgras thig le ji ltar shes she na / de yang sngags btu ba'i le'u las /

u shma nmams kyi bzhi pa la // rdo rje mkha' 'gro ma yis brgyan //
stong pas mnan cing sum 'gyur nyid //

ces gsungs(PN btus) pas u shma'i bzhi pa ni ha'o // rdo rje mkha' 'gro ma ni ū'o // stong pas mnan
pa ni thig le'o // de bas na thig le gnyis ni stong pa dang stong pa ma yin pa ste / dngos po ma yin
pa stong pa ni rdo rje sems dpa'i thig le'i rgya dang ldan pa'o // stong pa ma yin pa ni mi bskyod
pa'i thig le'i rgya dang ldan pa'o // de bas na zung du 'jug pa ste he (Ch479) ru ka'o // de yang 'di
skad du /

shrī ni gnyis med ye shes te // he ni rgyu stsogs(P sogs) stong pa nyid //
ru ni (N add sna) tshogs dang bral ba nyid // ka ni gang du'ang mi gnas pa'o //

zhes gsungs so // des na shrī ni gnyis su med pa ste / de ni(PN om) he ru ka'o // he ni he tu yo ga
zhes bya ste / (N200b) rgyu med pas na ma skyes pa'o // ru ni ru pa ka zhes bya ste / rang bzhin
med pa'am / rnam par rtog pa'i tshogs dang bral ba'o // ka ni ka ko ti sti zhes bya (D177b) ste / rtog
chad la sogs pa'i mtha' gang la yang mi gnas pa'o // de lta bu'i zung du 'jug pa gnyis su med pa
ni(D pa'i) mtshan nyid dang bral ba'i skad cig ma la lhan cig skyes pa'o //

二) 磨滅相の刹那—離歎喜 (D177b1) (P199b8) (Ch479L8)

de nas byang chub kyi(PN om) sems khu ba ltung bar gyur pa las bde ba nyams pa ste / gzung 'dzin
gyi rtog pa dang bcas par gyur pa la(PN las) rnam par nyed pa'i skad cig ma ste / dga' bral (P200a)
gyi dga' ba'o // dga' bral ni dga' ba rtog pa dang bcas pa dang / lhan cig skyes pa mi rtog pa gnyis
gnyis su med par bstan pa'i phyir / bzhi pa de yang de bzhin no // zhes gsungs pas bzhi pa ni dga'
bral lo // de zhes bya ba ni lhan cig skyes pa'o // yang zhes bya ba ni dga' bral gyi dga' ba'o // rtog
pa dang bcas pa dang rigs pas dpyad na mtha' bzhi las grol ba mi rtog par bsdu bar bya'o // de
bzhin no zhes bya ba ni dga' bral gyi dga' ba rtog pa dang bcas pa yang lhan cig skyes pa mi rtog
pa bzhin du shes par bya'o // de bas na(P ni) rtog pa dang mi rtog pa gnyis ni tha mi dad par shes
par bya'o // rdo rje 'chang gi dbugs dbyung ba rdzogs pa'i rim pa'o //

las kyi phyag rgya'i dga'(PN dbang) ba rnams lhan cig skyes par ro gcig ste / de yang 'di skad du /

dga' ba chen po gcig nyid la // phye bas rnam pa bzhi ru 'gyur //

zhe'o // de bas na dga' ba rnams ni ngo bo gcig pa ste / ma rtogs pa'i gang zag la de rtogs par bya
ba'i phyir las kyi phyag rgya bstan pa las bde ba mi rtog pa skyes pa dang rtogs(P rtog) pa stong
pa'i sems kyi khyad par gyi(PN gyis) skad cig ma ste / skad cig mas phye bas dga' ba bzhi'o //
des na dga' ba thams cad skad cig ste / rgyu mthun pa'i 'bras bu (N201a) zhes bya'o // dpe las kyi
phyag rgya mdor bsdus te bstan pa'o //

las kyi phyag rgya bcos ma las ma bcos pa'i phyag rgya chen po mi(P om) 'byung ste / 'dra ba'i
rgyu(PN rgyud) las 'dra ba'i 'bras bu 'byung ste / mi 'dra ba las ma yin pa bzhin du chos kyi(PN
kyis) phyag rgya ma bcos pa las phyag rgya chen po 'byung gi / bcos ma las kyi phyag rgya las ni
ma yin no // de yang 'di skad du /

mi yi phyag rgya ngang gis 'jug // de yi ye shes kyang ni 'jig //

ces gsungs so // de na las kyi phyag rgya las ni ma yin no //

Ⅲ 法印（円成次第）（D177b7）（P200a8）（Ch480L11）—上根

de nas gzhan yang chos (P200b) kyi (D178a) phyag rgya bstan par bya ste / de la chos kyi phyag
rgya'i rang gi ngo bo ni chos kyi(P ni) phung po dang khams dang / skye mched la sogs pa 'gro ba
sna tshogs yin la / phyag rgya ni de dag gi rang bzhin lhan cig skyes pa las ma 'das pa'o //

イ）多様相の刹那（初歓喜）（D178a1）（P200b2）（Ch480L14）

de la re zhiḡ dpe las kyi phyag rgya la dga' ba bzhi bstan pa bzhin du lam chos kyi phyag rgya la
yang dga' ba bzhi(P bzhi du) shes par bya'o // de la dga' ba bzhi ni dpe las kyi phyag rgya las skad
cig ma gsum pa la mtshon byed dpe'i lhan cig skyes pa nyams su myong ba ji lta ba des mtshon
bya (PN pa'i mtshon bya) don gyi lhan cig skyes pa ste / de 'di skad du /

lha dang mi yi(P yis) bde ba yis // bsdus byas rdo rje 'dzin pa yi //

bcu drug char yang mi phod do //

zhes gsungs pas las kyi phyag rgya las mtshon byed dpe'i lhan cig skyes pa nyams su myong ba las
khyad par du 'phags pa'i mtshon bya don gyi lhan cig skyes pa'i ye shes mi rtog pa gnyis su med
(Ch481) pa nyid rkyen las dang ma rig pa'i stobs kyis ma rtogs kyang lhan cig skyes pa de nyid
'gro ba sna tshogs kyi rang bzhin du snang gi / de las gzhan pa rnams ma yin par shes pa ni rnam
pa sna tshogs pa'i skad cig ma la dga' ba'o //

ロ) 異熟相の刹那 (最勝歓喜) (D178a4) (P200b5) (Ch481L3)

des na /

'khor ba spangs nas gzhan du ni // mya ngan 'das pa thob (N201b) mi 'gyur //

zhes gsungs pas / 'gro ba spangs pa'i pha rol nas lhan cig skyes pa rnyed par mi 'gyur te / 'gro ba'i rang bzhin yongs su shes na de nyid lhan cig skyes pa yin pas na 'gro bar 'dzin pa'i zhen pa spang ba'i phyir 'gro ba'i rang bzhin lhan cig skyes par shes nas de bzhin nyid la goms par byas na goms pa rab kyi mthar phyin pa(PN *om*) tsam na 'gro ba sna tshogs kyi zhen pa spangs nas thams cad lhan cig skyes par rtogs pa ni rnam par smin pa'i skad cig ma la mchog tu dga' ba'o //

ハ) 離相の刹那—俱生歓喜 (D178a6) (P200b8) (Ch481L11)

'gro ba sna tshogs kyi zhen pa spangs kyang lhan cig skyes pa'i 'dzin pa'i zhen pa phra mo yod pas de yang khyad par ma dmigs na (P201a) dper na lcags las byas pa'i sgrog dang / gser las byas pa'i sgrog gnyis rgyu la khyad par yod kyang 'ching ba la phyad par med do // de bzhin du tha mal pa'i 'gro ba sna tshogs su 'dzin pa'i rtog pa dang / gya nom pa la lhan (D178b) cig skyes pa tsam du 'dzin pa'i rtog pa la bzang rtog ngan rtog khyad par yon kyang zhen pa'i rnam par rtog pa'i zug rngu'i rang bzhin du khyad par med pas lhan cig skyes pa nyid du 'dzin pa'i zhen pa la 'jug pa las slar ldog par bya ste / yang dag tu na 'gro ba spang bar bya ba'am / lhan cig skyes pa bsgrub par bya bar ma grub ste / 'gro ba spangs pa las lhan cig skyes pa gzhan ma yin no // ma rtogs pa'i blo la tha dad du snang yang rtogs na 'gro ba nyid lhan cig skyes pa nyid 'gro ba'o // de ltar 'gro ba dang lhan cig (Ch482) skyes(D skyas) pa gnyis kyi zhen pa spangs te gnyis su med pa'i shes pa zung du 'jug pa ni mtshan nyid dang bral ba'i skad cig ma la lhan cig skyes pa'i dga' ba'o //

二) 磨滅相の刹那—離歓喜 (D178b3) (P201a5) (Ch482L2)

de ltar mnyam par gzha(PN bzhag) pa'i shes pa la gnyis su med kyang rjes las thob pa la sna tshogs kyi rtog pa gzung ba dang 'dzin pa dang bcas pa ni rnam par nyed pa'i skad cig ma la dga' bral lo // (N202a) mnyam par gzha(PN bzhag) pa'i shes pa dang / rjes la thob pa'i shes pa gnyis su bstan pa'i phyir / bzhi pa de yang de bzhin no // zhes bya ba la / bzhi pa zhes bya ba ni dga' bral dang rjes thob bo // de ni lhan cig skyes pa ste / mnyam par gzha(PN bzhag) pa'i shes pa'o // yang na rjes thob kyi rtog pa nyid mtha' bzhi las grol ba ste / rang zhin med pa'o // de bzhin no zhes bya ba ni rjes thob kyi rtog pa yang mnyam gzha gi rtog pa bzhin no // de bas na mnyam gzha dang rjes thob gnyis su med de zung du 'jug pa'o // chos kyi phyag rgya'i dga' ba bzhi yang dgongs pa snga ma bzhin du dga' ba rnams gcig gi ngo bo ste / rnam par smin (P201b) pa'i 'bras bu'o // de yang /

rgyu chung 'bras bu che ba'i phyir // rnam par smin pa zhes(D rjes) su brjod //

ce'o // de bas na rgyu las kyi phyag rgya bas dga'(D dka') ba chung la 'bras bu phyag rgya chen po thob tu rung bas ni rnam par smin pa'i 'bras bu ste / rnam par smin pa'i skad cig ma la mchog tu dga' ba zhes bya'o // lam chos kyi phyag rgya yongs su rdzogs pa'i rim pa mdor bsdus te bstan pa'o // chos kyi phyag rgya yang las kyi phyag rgya la ltos(PN bltos) na ma bcos pa yin la / phyag rgya chen po la ltos(PN bltos) na bcos ma yin te / dgag pa dang sgrub pa (D179a) dang bcas pa ste bcos ma'o // gzhan yang dpe las kyi phyag rgya las mtshon byed dpe'i lhan cig skyes pa (Ch483) nyams su myong ba yang mtshon bya don gyi lhan cig skyes pa nyams su myong ba med pas na phyag rgya chen po sgrub pa'i yan lag ma yin no //

大印（自性次第）（D179a1）（P201b4）（Ch483L2）

定義

da ni phyag rgya chen po nyid bstan par bya ste / phyag rgya chen po'i rang gi ngo bo'i(PN bo ni) phyag rgya ni mi 'das pas na phyag rgya ste / dper na 'khor los sgyur ba'i rgyal po chen po'i bka' rtags kyi phyag rgya las mtha' khob kyi rgyal phran dang blon po (N202b) gang gis kyang 'da' mi nus pa bzhin du / phyi nang gi chos sna tshogs pa rnams phyag rgya chen po lhun gyis grub pa'i ye shes zung du 'jug pa'i ngo bo las mi 'da' bas na(N nas) phyag rgya yin la / chen po ni las kyi phyag rgya dang / chos kyi phyag rgya dang / dam tshig gi phyag rgya gsum gyi ngo bo yin pas na chen po'o // ci phyag rgya chen po la yang dga' ba(P om) bzhir dbye'am ci zhe na / de ni ma yin te / phyag rgya gsum la dga' ba bzhir dbye'i phyag rgya chen po la ma yin no // de ci'i phyir zhe na / phyag rgya chen po ni dri ma dang bral ba'i 'bras bu ste / de bas na skad cig ma gsum dri ma dang bcas pa 'dir mi 'byung bas des phye ba'i dga' ba gsum yang 'dir mi 'byung ngo // des na dga' ba bzhir mi dbye'o // rgyu mtshan yang phyag rgya chen po (P202a) ni 'bras bu lam du byed pa'o // 'bras bu ni phyag rgya chen po ste / dngos po'i de kho na ji lta bar rtog(PN rtogs) pa de nyid de / de la dgag pa dang sgrub pa med de / de bas na dga' ba bzhir(PN bzhi du) mi dbye'o // de yang 'di skad du /

skad cig gcig gis rdzogs sangs rgyas //

zhes gsungs pas gang gi tshe ma rtogs na 'khor ba yin la / rtogs na de nyid phyag rgya chen po yin la dgag bya dang bsgrub bya med do // des na dga' ba bzhi du dbye ba ni ma yin no // de la phyag rgya chen po ni gnyen po dang / de kho na nyid dang / 'bras bu gsum la re ba med pa'o // de la gnyen po la re ba med pa ni mi mthun pa'i (Ch484) phyogs ser sna dang / 'chal ba'i tshul khriims dang / khong khro dang / le lo dang / rnam par g'yeng ba dang / ma rig pa spang ba'i phyir gnyen po'i phyogs pha rol tu phyin pa drug gis spong bya spong byed gang la yang zhen pa med pa'o // (D179b) de kho na nyid la re ba med pa ni de kho na gang gis thar pa dang / thams cad mkhyen pa thob par byed do snyam pa'i zhen pa med pa'o // 'bras bu la re ba (N203a) med pa ni 'khor ba las gzhan pa'i phyag rgya chen po thob par 'gyur ro snyam du sems pa'i zhen pa'i rtog pa med pa ni

phyag rgya chen po ste / de nyid don lnga dang ldan pa'o //

和訳

3) 正しい灌頂 (持金剛の蘇息・究竟次第)

四刹那・四歓喜の順番

イ) 多様相の刹那 (平等瑜伽 $\subseteq$ 阿闍梨灌頂) — (初歓喜)

つぎに、了義の正しい灌頂次第である持金剛の安息を説示すべきである。始めに外的所作である接吻や抱擁から始めて男根 (bola) と女陰 (kakkola) の平等瑜伽である攪拌の瑜伽の時に所取と能取の分別知があるのが多様相の刹那 (vitrakārakṣaṇa) であり、初歓喜である。それ (Ch475) も以下の言葉で、

E 字の美しい姿はその中央の Vam 字で飾られる。〔それは〕一切の樂の住処であり
仏の宝筐である¹⁹

と説かれている。一切の歓喜が生起する住処として知るべきであるから、接吻といった所作だけが歓喜ではないのである。また恣意的でもなく、口訣からの略説と広説と極広説として示されているのである。その内、略説の

抱擁と接吻などの多様は多様相の (P198a) 釈説²⁰

とは、抱擁と接吻から始めるのであって、それらの語によって女陰 (bhaga) と男根 (liṅga) の平等瑜伽による攪拌の瑜伽が歓喜と知るべきである。
それでは、「など」の語で平等瑜伽をどのように理解すべきかというならば、理解させるために広大に釈説されて、

十六歳の般若母 (D176a) を二臂で正しく抱擁すべし。金剛と鈴の平等瑜伽は阿闍梨灌頂と語られる²¹

と説かれているから、阿闍梨灌頂は初歓喜であり、金剛と鈴の平等瑜伽とは男根 (bola) と女陰 (kakkola) の瑜伽である。従って、初歓喜も平等瑜伽から證得すべきである。それでは、初歓喜を成就させた上で、阿闍梨灌頂の偈頌はどのように理解すべきかと言うならば、その理由が極めて広大に釈説される。

阿闍梨・秘密・般若と第四もそれと同様である。灌頂は四の数で歓喜などの順を知るべし²²

と説かれているから、阿闍梨灌頂は〔初〕歓喜であり、男根と女陰の平等瑜伽から知

るべきである。それでは、(Ch476) 水灌頂などの阿闍梨灌頂と釈説されたものは必要なのかと言うならば、そうではない。それは外的生起次第であって、究竟次第ではないのである。

ロ) 異熟相の刹那(最勝歓喜)

つぎに、菩提心は世俗〔としては〕kunda〔花〕の如くであり、勝義〔としては〕楽を自性とするから、金剛摩尼の円に住して所取と能取が空となって自證の円成を知覚することが異熟相の刹那(vipākakṣaṇa)であり、最勝歓喜である。それも略説と広説の二種で理解すべし。その内、略説は、

その異熟から離転した楽の智慧(P198b)は甚深である²³

と説かれているので、その異熟はそれから転じるのであって、「それ」とは、多様相であって、所取と能取〔の分別〕である。所取と能取から転じることは、所取と能取が空となって円成した自證が異熟相の刹那(vipākakṣaṇa)であって、最勝歓喜である。〔問う〕それでは、これもまた異熟の刹那であり、最勝歓喜ではないと言うならば、最勝歓喜を理解するために広説されて、

最勝歓喜が正しく得られる多様が断じられた刹那に説者が言葉で、大薩埵よ、大楽を執持せよ²⁴

と言うことは、多様が断じられるのであり、(D176b) 多様は多様相である。それが断じられる刹那が異熟であり最勝歓喜である。

ハ) 離相の刹那—俱生歓喜

さて、俱生〔歓喜〕を説示するために、『幻化網大タントラ』の中で、

十六の四半分の心滴をもつものであり、支分をもたず部分を超越したものである²⁵。

と説かれていて、大楽輪の Ham 字が光明に融化して十六の半分の八〔となり〕、八(Ch477)の半分の四心滴〔となる〕。二つ〔の心滴〕は女陰に落ちて、二つは部主の口と明妃の頭頂に等同に住する。それも以下の言葉で、

二つ〔の心滴〕は〔既に女陰に〕あり、〔別の〕二つ〔の心滴〕は〔鈴口と陰核の〕中間に等同に〔残る〕。金剛から落ちて蓮華に触れる。金剛から落ちる〔心滴は〕阿闍であり、蓮華に触れた〔心滴は〕金剛〔薩埵〕である。因は果によって刻印され、

果は因によって刻印される。これは大樂の王である²⁶

と説かれているから、〔四つ内の〕二つの心滴が落ちて、〔残りの〕二つが等同に住する。部主の口（鈴口）に住するのが阿闍である。明妃の頭頂（陰核）に住するのは金剛薩埵であり、空性で（P199a）無自性なる般若である。果である金剛薩埵が因である阿闍に刻印するから常住の辺を払拭し、知覚自体を無自性とするのである。また阿闍が金剛薩埵に刻印するから断滅の辺を払拭して無自性を知覚せしめるのである。このように、知覚と空性は双運である。真実において、金剛薩埵である空性と悲および方便と般若は無二であると言われて、二辺には住しないのである。そのことを別に証明するために略説と広説と極広説である。

十五部分を自性とする月が菩提心となる。大樂は Āli（母音）の形で瑜伽女たちはその部分である²⁷

と説かれるのは、十六部分の満月は、十五の属性を具えているから、菩提心の象徴であり、菩提心は大樂であり、Āli と Kāli（子音）の（Ch478）形である。Āli の内、A 字は尊主（D177a）ヘーヴァジラである。残余の十五は女尊たちの種字である。従って、第十六番目の Ah 字は涅槃点であり、二つの心滴となる。従って月は菩提心で、大樂は Āli である。Āli の十六番目は心滴二つずつと知るべきである。

〔問う〕それでは、どうして十六番目の Āli が主尊ヘーヴァジラを自性とする大樂であるのかと言うならば、それを明示するために広大に説示して、

その理由は、十六部分は存在しない。努めて一切の残余を断じて効果的作用をなさないが故に²⁸

と説かれており、十五の Āli によって女尊たちの種字となし、十六番目の母音（Āḥ）は生起がなく、効果的作用や滅もないのである。（P199b）従って、不生は尊主ヘーヴァジラである。それでは、尊主ヘーヴァジラ自身が二つの心滴であるとどのようにして知のかと言うならば、二つとして成立する理由が、極広説される。

最勝〔歓喜〕の終わりと離歓喜の中間において空であり非空であるヘールカ〔が住す〕²⁹

と説かれている。従って、最勝歓喜と離歓喜の中間に〔住する〕尊主ヘールカはヘーヴァジラであり、二つの心滴である。

〔問う〕それでは、空の語によって心滴をどのように知るのかと言うならば、それも「マントラ摂受の章品」で、

UŚMA の四つはヴァジラダーキニーによって莊嚴される。空が制圧して三となる

30

と説かれているので、UŚMA の第四は Ha である。ヴァジラダーキニーは Ū である。空によって制圧されたものは心滴である。従って、二つの心滴は空と非空であって、非存在である空は金剛薩埵の心滴の刻印をもつ。非空は阿閼の心滴の刻印をもつ。従って、双運であり (Ch479) ヘールカである。それも以下の言葉で、

Śrī は無二の智慧、He は因などの空性、Ru は積聚を離れ、Ka は何処にも住しない

31

と説かれている。従って、Śrī は無二であって、それはヘールカである。He は hetuyoga と言われ、無因であるから不生である。Ru は rupaka と言われて、無自性あるいは妄分別の集積を離れたものである。Ka は kakotisti と言われ、(D177b) 常住と断滅などのいずれの辺にも住さないものである。このような双運無二である離相の刹那が俱生〔歓喜〕である。

二) 磨滅相の刹那—離歓喜

つぎに、菩提心である精液 (śukra) が落ちることで樂を知覚して所取と能取の有分別となっているものが摩滅相の刹那 (vimardanakṣaṇa) であり、離歓喜 (P200a) である。離歓喜は有分別の歓喜であり、〔それと〕無分別の俱生〔歓喜〕は無二であると説示するために、「第四もそれと同様である」と説かれているから、第四は離歓喜である。「それ」とは、俱生〔歓喜〕である。分別を伴うものを論理によって吟味すれば、四辺から解放された無分別として集められる。「同様に」とは、分別を伴う離歓喜もまた無分別の俱生〔歓喜〕と同様であると知るべきである。従って、分別と無分別の二つは不異であると知るべし。〔以上が〕持金剛の安息であり究竟次第である。

羯磨印の諸の歓喜は俱生〔歓喜〕と一味であって、それも以下の言葉で、

大歓喜は一者であるが区別すれば四種となる³²

と言われる。従って、(Ch480) 諸の歓喜の本性は同じであり、未證得の人にそれを證得させるために羯磨印が説示されてから、無分別の樂の生起と證得が空である心の差別の刹那であって、刹那によって区分すれば四歓喜である。従って、すべての歓喜は刹那であり、等流果 (niṣyandaphala) であると言われる。例喩である羯磨印を要約

して説示したのである。相似の因から相似の果が生じるのであり、異なるものからではないように、非人為的の法印からは大印が生じるが、人為的 (krtrima) の羯磨印からではないのである。それも以下の言葉で、

人間の印契は本性として滅し、その智慧も滅する³³

と説かれている。従って、〔大印は〕羯磨印から〔生じるの〕ではないのである。

3 法印 (円成次第)

つぎにまた、法印 (D178a) を説示すべきである。そこで法印自体の本性は法の蘊・界・処など様々な世界であり、印契はそれらの自性が俱生を越えないことである。

イ) 多様相の刹那 (初歓喜)

そこで、まず、喩例である羯磨印について四歓喜を説示したように、道である法印についても四歓喜として知るべきである。そこで、四歓喜については、喩例である羯磨印から第三刹那において特相づける喩例の俱生〔歓喜〕を知覚したように、それによって特相づけられるのが本体の俱生〔歓喜〕であって、それは以下の言葉で、

尊格と人間の楽によって摂集されたものは、持金剛の十六部分としても不変である³⁴

と説かれているから、羯磨印の特相づける喩例である俱生〔歓喜〕の知覚よりも殊勝に優れた特相づけられる本体の俱生智は、無分別で無二に他ならず、(Ch481) 縁と無明のせいで證得できないとしても、まさにその俱生は多様な世界の自性として顕現するが、〔しかし〕それ以外の諸〔の存在〕ではないと知るのが多様相の刹那における歓喜である。

ロ) 異熟相の刹那 (最勝歓喜)

その故に、

輪廻を離れて他に涅槃は得られない³⁵

と説かれているから、世界を遠離した彼岸から俱生は獲得できないのであり、世界の自性を普く知るならば、それこそが俱生に他ならないから、世界を能取する執着を放棄して後に、世界の自性が俱生であると知って真如について数習するときに、数習の正しい辺際に至るだけで多様な世界の執着を遠離して一切が俱生であると證得することが異熟相の刹那における最勝歓喜である。

ハ) 離相の刹那—俱生歡喜

多様な世界の執着を遠離しても俱生への微細な能取の執着は存在するから、それも特別に対象としなければ、(P201a) 例えば、鉄で作られた鎖と金で作られた二つの鎖は素材の区別はあるとしても、縛ることに区別はないのである。それと同様に、凡俗の世界を多様に把握する分別と円満した上で俱生 (D178b) のみとして能取する分別については、良い分別と悪い分別の区別はあるとしても、執着という分別の苦痛自体に区別はないから、俱生自体について、能取の執着に入ることからも転じるべきであり、正しくは、断じるべき世界も成就されるべき俱生も成立しないのであって、所断の世界と俱生は別ではないのである。未證得の慧には異なって顕現するとしても、證得すれば世界自体がまさに俱生である。このように、世界と俱生 (Ch482) の二つ〔について〕の執着を断じた無二・双運の智が離相の刹那における俱生歡喜である。

二) 磨滅相の刹那—離歡喜

このように、等至の智においては無二であっても、後得において所取と能取を伴う多様な分別のあるのが磨滅相の刹那 (vimardanakṣaṇa) における離歡喜である。等至の智と後得の智の二つとして示されるから、「第四もそれと同様である」と言われ、「第四」とは、離歡喜と後得智である。「それ」とは俱生〔智〕であって、等至の智である。あるいは後得の分別自体は四辺を離れており無自性である。「同様である」とは、後得の分別も等至の分別と同様である。従って、等至と後得〔の分別〕は無二・双運である。法印の四歡喜も密意は先と同様に諸の歡喜は一自性であって、異熟果 (vipākaphala) (P201b) である。それはまた、

因は小さく果は大きいから、異熟の後と語られる³⁶

と言われる。従って、因である羯磨印よりも歡喜は小さいが、果である大印が得られるにふさわしいから異熟果であって、異熟の刹那における最勝歡喜と言われるのである。道である法印円成の次第を要約して説示したものである。法印も羯磨印に歓待すれば非人為的であるが、大印に歓待すれば人為的である。否定と肯定を (D179a) 伴って人為的である。あるいは、例喩である羯磨印よりも特相づけるものの例喩である俱生〔歡喜〕を知覚するけれども、特相づけられる対象の俱生を知覚すること (Ch483) はないから、大印が成就する支分ではないのである。

IV 大印 (自性次第)

定義

それでは、大印を説示しよう。大印の本性である印契は不越であるのが理由であり、例えば、大転輪王の勅命の印をいかなる辺境の藩王や大臣も違犯できないように、内外の多様な諸法は、無巧用の智慧・双運を本性とする大印を越えることはできないか

ら印契であって、「大」は羯磨印と法印と三昧耶印の三つの本性であるから大である。大印も歓喜は四つに区別されるのかと言うならば、そうではない。三印(羯磨印・法印・三昧耶印)について歓喜は四つに区分されるが、大印についてはそうではないのである。それは何故かと言えば、大印は離垢の果であって、その故に、有垢の三刹那がここでは生じないからそれによる区分である三歓喜もこれには生じない。従って、歓喜を四つに分けないのである。因の特相も大印は (P202a) 果である道となすのである。果は大印であり、事物の真実そのままに考察したのが真実であって、それについて否定と肯定はなく、その故に歓喜を四つに分けないのである。それも以下の言葉で、

一刹那で正等覚〔を成ず〕³⁷

と説かれているから、いかなる時も未證得ならば輪廻であるが、證得すれば真実の大印である上に、否定される対象も肯定される対象もない。従って、歓喜を四つに分けないのである。そこで、大印には対治と真如と果の三つに対する願楽がないのである。その内、対治について願楽がないとは、所対治分である (Ch484) 慳貪と破戒と忿怒と懈怠と散乱と無明を断じるための能対治分である六波羅蜜による所断と能断の何についても執着が存在しないのである。(D179b) 真如に対する願楽がないとは、何であれ真実によって解脱し一切智を得ようと思う執着が存在しないのである。果に対する願楽がないとは、輪廻とは別に大印が得られると思う心の執着である分別が存在しないのが大印であって、それ自体が五つの意味をもつ。

(以下、別稿掲載予定)

おわりに

本誌『密教文化研究所紀要』は、割当頁数の関係で複数号に跨る論考の掲載を許してくれる研究者には有難い学術誌である。筆者もインド後期仏教の有力な集団であるマイトリパ学統に属するヴァジラパーニ作 GPU をこれまで、別冊に分けて発表してきた。その場合、一貫する当該テーマは各号毎にその冒頭で「はじめに」と題してある程度の重複は承知で記述することができる。しかし、これまでの数十年にわたる研究で既に論及し発表している基本的な内容や概念についてはどうであろうか。顧みれば、後期インド仏教世界のタントラ典籍に頻出する聚輪 (gaṇacakra) 儀礼を切り口に研究の世界に足を入れてから 30 年が過ぎた。かつて学位請求論文『ガナチャクラの研究』を上梓した際にある先学から、作家村上春樹に付けられた「村上春樹ワールド」を捩って、「静春樹ワールド」とのお言葉を賜った。自分の力不足は承知の上で、なおも「大きな物語」に惹かれる性向の私はそれに勇気づけられた。そして夜郎自大を恐れず「インド仏教金剛乗がもった解脱システムの解明」というテーマの下に、上

梓したのが『ガナチャクラと金剛乗』である。以下、筆者のインド仏教についての見解を自ら確認するのと研究の中締めの意味で、『ガナチャクラと金剛乗』「序文」の一部を引用する。

声聞乗・波羅蜜乗・金剛乗の各がこの三つの術語で表現される契機をもつことに気づいた。この三カテゴリーの内、見は修習と行に具現され、また両者の基底にあってその成立の意味を保証している。修習は宗教実践者の精神作用に焦点を当てることで切り取られる領域である。金剛乗（ここでは無上瑜伽階梯）では生起・究竟の二次第の実修マニュアルとして体系化して叙述されている。つまり修習の方規であり、それ自体としては実修者個人の意識と身体から出るものではない。行者が観想によって曼荼羅世界を創出しようが、秘儀的身体生理理論 (mystic physiology) を用いて「成仏」しようがそれは実践者個体において完結する性格を出ることにはない。三番目の行は、宗教実践者の具体的な行儀・規範・所作に焦点を当てることで論じられる領域である。この範疇の特相は、宗教者個人の実践が個体の観念内存在の枠を出て、理念的存在とは異なる現実世界の他者との交渉を要請し、またそれを実際に取り込んで開ける世界だと言えることである。この位相 (aspect) が本来的に悲 (karṇā) が作動する地場 (topos) である。つまり行は個人の「外的本質」として他者に向けて開かれ、他者と不可避的な交渉に入る。こうして、実践者に体现された見と修習と行の三つの位相が縋い交ぜられて仏教徒の宗教実践の総体が現前する。とくに、修習と行については、「心身問題」として知られる人間存在のあり方によって、実際の宗教実践で両者は同時平行的で不可分であることから複雑な問題が生じる。ある一つの事象は修習でもあり、それは行でもあると見なし得るからである。

¹ 仏教徒の理論と実践のあり方を説明する三分法として聞思修（三慧）も知られている。しかし「実在」と「観念」の峻別を哲学的立場とする筆者は、インド仏教、さらには全ての仏教なる思想運動を対象とするには、「三学」が適当であるとして選んだ。

² 『真実撰経』における真実は、具体的には四印契・四種曼荼羅などに象徴される身口意の三密を指す。
³ アバヤーカラグプタの場合では Vajrāvalī がそれに当たる。

⁴ [桜井: 171] では、「一般に無上瑜伽階梯の灌頂の基本構造は〈瓶灌頂〉・〈秘密灌頂〉・〈般若智灌頂〉・〈第四灌頂〉の四種体系として説明されている」と述べた後で、瓶灌頂の術語をさらに詳しく論じている。

⁵ 『秘密集会』 p.121, [松長: p.221]

⁶ GPU D1703-4, P191b5-6, [静 2021: 47]

⁷ [密教聖典研究会 1989: 108-111]

⁸ [密教聖典研究会 1989: 115-117]

⁹ [Isaacson and Sferra: 388L6-L7]

¹⁰ [桜井: 148]

Vāgīśvarakīrti はこれらに〈阿闍梨の事業〉を加えた三項目の説示を纏めて「適格性 (bhavya)」という儀礼名で呼んでいる。

- ¹¹ GPU D175b6-176a4, P197b8-198a6.
¹² HV II -3(7ab) p.52.
 vicitraṃ vividhaṃ khyātaṃ ālīṅgacūṃbanādikaṃ /
¹³ HV II -3(13) p.54,
 pāṇibhyaṃ tu samāliṅgya prajñāṃ vai ṣoḍaśābdikāṃ /
 ghaṇṭhāvajrasamāyogād ācāryasecanaṃ mataṃ // (13)
¹⁴ HV II -3(10) p.54.
 ācārya guhya prajñā ca caturthan tat punas tathā /
 ānandāḥ kramaśo jñeyāś catuḥsecanasamkhyayā // (10)
¹⁵ [Isaacson and Sferra: 387L23~388L10]
¹⁶ Toh 3716 Tsu.170a7-b3.
¹⁷ [Isaacson and Sferra: 351]
 bāhyotpattyā tan neyam / tarhy udakābhiṣekādīnām ācāryatoktā yā sā katham / sāpi bāhyotpattyā jñeyā /
 tathāgatāśvāsānande cācāryatā gambhīrotpattyā vajradharāśvāsānande cotpannena / caturmudrāpakṣe ca
 pariniṣpannenācārytvena karmamudrā boddhavyā //
¹⁸ [Isaacson and Sferra: 304]
¹⁹ HV II -3(4) p.52.
 E-kārākṛti yad dvayaṃ madhye Vaṃ-kārabhūṣitaṃ /
 ālayaḥ sarvasaukhyānām buddharatnakaraṇḍakaṃ // (4)
²⁰ HV II -3(7ab) p.52.
 vicitraṃ vividhaṃ khyātaṃ ālīṅgacūṃbanādikaṃ /
²¹ HV II -3(13) p.54.
 pāṇibhyaṃ tu samāliṅgya prajñāṃ vai ṣoḍaśābdikāṃ /
 ghaṇṭhāvajrasamāyogād ācāryasecanaṃ mataṃ // (13)
²² HV II -3(10) p.54.
 ācārya guhya prajñā ca caturthan tat punas tathā /
 ānandāḥ kramaśo jñeyāś catuḥsecanasamkhyayā // (10)
²³ HV II -3(7cd) p.54.
 vipākaṃ tadviparyāsaṃ sukhajñānasya bhuñjanaṃ // (7)
²⁴ HV II -3(22) p.54.
 paramānande tu samprāpte nānātvavarjite kṣaṇe /
 śāstā brūyāt mahāsattva dhāraṇīyaṃ mahat sukham // (22)
²⁵ Paramārthanāmasaṃgīti 『真実名義經』 (10)3, 梅尾 p.337~338.
 ṣoḍaśārdhārdhabindudhṛk / akalaḥ kalanātītāt /
²⁶ Apabhraṃśa and skt. [Isaacson and Sferra:294fn228~295].
²⁷ HV II -4(26) p.64.
 bodhicittaṃ bhavec candraṃ pañcadaśakalātmakaṃ /
 ālirūpaṃ mahāsaukhyāṃ yogīnyas tasyāṃśakāḥ // (26)
²⁸ 出典未確定
²⁹ HV II -5(70cd) p.86.
 paramāntaṃ viramādhyāṃ śūnyāśūnyaṃ tu herukaṃ // (70)
³⁰ 出典未確定
³¹ HV I -7(27)p.24.
 śrīkāraṃ advayaṃ jñānaṃ hekāraṃ hetvādiśūnyatā /
 rukārāpagatavyūhaṃ kakāraṃ na kvacit sthitaṃ // (27)
³² 出典未確定
 eka eva mahānandaḥ pañcatām yānti bhedanaiḥ // (52)
³³ 出典未確定
³⁴ 出典未確定
³⁵ HV II -4(32cd) p.66.
 saṃsārād ṛte nānyan nirvānaṃ iti kathyate // (32)
³⁶ 出典未確定
³⁷ 出典未確定

略号

ad: addition (追加)

b: birth year (生年)

Ch: 中華大藏経丹殊爾

D: デルゲ版西藏大藏経

ed: edition (編集)

em: emendation (訂正)

fn: footnote (脚註)

L: line (行)

N: ナルタン版西藏大藏経

om: omission (欠如)

P: 北京版西藏大藏経

p: page (頁)

参考文献

一次資料

真理の宝環: *Tattvaratnāvalī* by Advayavajra, Ui, H. (rev), 『大乘仏典の研究 (大乘仏教研究 1)』
岩波書店, 1979 (1963) .

上師相承次第口訣 (GPU): *Vajrapāṇi, Guruparaṃparakramopadeśa*, Toh 3716.

二儀軌: Snellgrove, D.L. (ed) *The Hevajra Tantra: A Critical Study*, London Oriental Series 6,
Oxford University Press, 1959., Toh 417, 418.

Farrow, G.W. and Menon, I. (ed) *The Concealed Essence of the Hevajra Tantra*, Motilal
Banarsidass, Delhi, 1992.

Caturmudropadeśa: [Isaacson and Sferra 2014: 385~398]

Sekanirdeśapañjikā: [Isaacson and Sferra 2014: 337~359]

秘密集会: 松長有慶 (ed), 『秘密集会タントラ校訂梵本』 東方出版, 1978, Toh 442, 443.

二次資料

磯田熙文 「pāramitā-yāna と mantra-yāna」 『東北大学文学部研究年報』 28, 1978.

大塚伸夫 『インド初期密教成立過程の研究』 春秋社, 2013.

桜井宗信 『インド密教儀礼研究』 法蔵館, 1996.

静 春樹 「マイトリパの弟子ヴァジラパーニをめぐる諸問題と『上師相承次第口訣』
和訳研究 (1)」 『密教文化研究所紀要』 34, 2021.

「マイトリパの弟子ヴァジラパーニ作『上師相承次第口訣』和訳研究 (2)」 『密
教文化研究所紀要』 35, 2022.

「般若母タントラの修習論における快樂の位置: マイトリパとその弟子たちの所
説を Isaacson と Sferra に学ぶ」 『密教文化』 247, 2021.

野口圭也 「21 世紀のマンダラ観想法」『密教学研究』37, 2005.

松長有慶 『松長有慶著作集』5, 法蔵館, 1998.

密教聖典研究会 「アドヴァヤヴァジュラ著作集: 梵文テキスト・和訳」『大正大学総合佛教研究所年報』10~13, pp.178~234, 200~259, 282~316, 242~291; 1988~1991.

Isaacson, H and Sferra, F, *The Sekanirdeśa of Maitreyañātha (Advayavajra) with the Sekanirdeśapañjikā of Rāmapāla: Critical Edition of the Sankrit and Tibetan with English Translation and Reproduction of the MSS*, Universita Degli Studi di Napoli L'Orientale, Napoli, 2014.

キーワード

ヴァジラパーニ マイトリパ (アドヴァヤヴァジラ) インド金剛乗『上師相承次第口訣』
四歓喜説 ラーマパーラ